

「いまパリに山路という日本文化が発生していると桜井大いに語る」

私は大言壮語をもつてもう一つの世界を語り山地なるものを何らかの形で錯誤 誤解の最も颯の爆発への誘惑を駆り立てるものそれはなにか。対峙させ並列することは何か。ここに山路・桜井の相違を通じて彼等が生きている世界をそれぞれに破壊してみる。所詮、断るまでもないが他人どころか真の敵とはお互いに良く理解しているにも関わらず、それをおくびにも見せない友情がある。なにしろ言葉が死んで久しい。死んだ役にたたないその死語を列ねようとする熱意は何処からくるのか、私には分からないが目の前に標的がある以上、第二次世界大戦中に育った老人は無意識の内に引き金を引いて撃破してしまっていた。友情の外におかれた静けさの中で私は珍しく考えはじめた。夢を託すということはどういうことなのか。

